

原の三代は直享。四代高信は栃木足利の築館利左衛門助直に殺されたという。

(五城目町史)

#### 5. やしゃふくろ

夜叉袋は細長い街村である。『測量日記』にも、「家百軒斗、道ノ左右ニ有」とある。この集落も貞和4年(1348)・同5年(1349)の板碑があり、また「蝦夷湊」の字名があつたりしていかにも古い感じがする。

やはり『秋田家文書』天正19年(1591)の記録にも見え、実季が秋田杉を畿内へ運んでいた頃、この村の「才八郎」という人物が「引き手」をつとめたとも言う。「引き手」の実態は明確でないが、杉材を製材するときを使う「大鋸」の使手らしく、当時は「木びき」集団として集落に生活していた。この才八郎が「木びき」であったとすれば、夜叉袋に木びき集団がいたと思うが結論は下せない。正保4年(1647)「出羽一国絵図」で180石、『享保郡邑記』では家数105軒とあるが、この集落は慶長期(1596～1615)の戸村堰の開削に伴なって開発を加えている。

ここで、この付近の景観をさぐる意味で紀行文を紹介すると、先ず菅江真澄であるが、彼は『雪の道奥雪の出羽路』で三倉鼻から南下した状況を記述している。平凡社刊の内田・宮本両氏絹訳では、「……夜叉袋の蝦夷の湊などというところをへて一日市の浦の部落に暗くなるころ着いて、宿をとった。13日朝早く、宿を出た。左方の押切というところに寺がある。この寺は浦というところからここにうつして、むかしは花嶽山石頭寺といった。……やや大きな河(馬場目川)を舟でわたった。……こうして今戸・飯塚・妹川・虻川・大久保・新関にでて、湖岸から離れた」となっている。

景観はともかく、大まかな道筋は参考になろう。これに対し、『東遊雑記』はやや具体的になる。

「11日 一日市村出立。五里豊岡、野代浦止宿。一日市より豊岡まで平地にして、八郎が沼のほとりを通り、馬上より男鹿の島を見るに風景至てよし。西南の方は広大の原にて、すすき間もなく、桔梗・かるかやのさかりなり。僅に見ゆると違ひて、1里余もある原に一面に咲しは至て見事にし

て、人々馬をとどめて暫く詠し事なり。此辺にては言語解せず、馬卒に所の名あるいは花の名、又は行程を問ふに、通る事は稀なり。無言にて笑ふのみ。まま興もありし事也。」

「歴史の道調査報告Ⅳ 北部羽州街道」

秋田県教育委員会

#### 6. やしゃふくろ(八郎潟町)

「やしゃがふくろ」ともいい、夜砂が侍・野舎箇・屋しゃ袋とも記す。八郎潟残存湖東岸、湖東街道沿いに位置する。土師器片が出土。古くは馬場目川は当地を河口とし、舟着場としてにぎわったという。蝦夷湊(えぞみなと)の地名はその名残と伝えられる。

〔中世〕夜叉袋村

戦国期から見える村名。出羽国秋田郡のうち。天正19年正月17日豊臣秀吉が秋田実季の当知行地を安堵した朱印状写に、「夜叉ふくろ村」179石余とあるのが初見(秋田家文書)。後谷地墓地や川原崎(かわらざき)に貞和4・5年などの紀年銘を含む板碑が9基現存。「家長6年秋田家分限帳」では「湖東通夜叉袋村」202石余が栗沢弥五郎の代官所支配に指定。八郎湖上舟運・同漁業にも恵まれる。慶長3年7月伏見作事板隣国衆引渡分覚書には、小野寺氏分50間のひき手として、「やしゃふくろの才八郎」の名が見える(秋田家文書)。

〔近世〕夜叉袋村

江戸期～明治22年の村名。秋田郡のうち。秋田藩領。寛永3年戸村十大夫と当村松田長右衛門らによって戸村堰完成、同5年より真崎長右衛門、同6年より武石角之丞等指紙開による開発を進める(町史)。この間一向堂村を当村に含み、「正保国絵図」「元禄7郡絵図」ともに180石余と図示。しかし開発の結果、「享保黒印高帳」では村高619石余・当高590石余(うち本田23・本田並261・新田95)、「寛政村附帳」で591石余(うち蔵分3・給分587)と認定。「天保郷帳」で590石余。枝郷に下羽立・中羽立の2か村を擁し、戸数は「享保郡邑記」「秋田風土記」ともに105軒。親郷一日市村の寄郷である。漁業も盛んであり、正徳2年今戸以北の湖岸9か村の漁場入会に如わる(八郷